HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アートを媒介にする教育的アプローチに関する研究 ： 学校空間における集団的創造活動を中心に
Author(s)	蔡, 越先
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 137, 31-45
Issue Date	2020-12-23
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.137.31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80284
Type	departmental bulletin paper
File Information	05-1882-1669-137.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アートを媒介にする教育的アプローチに関する研究

―学校空間における集団的創造活動を中心に―

蔡　　越　先*

【要旨】アートを媒介にする教育的アプローチは，アート活動を通じて教育実践を展開することを目指すものである。その特徴と意義を解明するために，本稿は，学校空間の日常を媒介するアートによる集団的創造活動に焦点を当て，実証的に検討することを目的とする。

まず，学校空間の日常を媒介するアートによる集団的創造活動をソーシャリー・エンゲイジド・アートとして捉え，それが有する社会的インパクトをアートと教育学の接点から，芸術の教育的作用が機能するプロセスとして検討する。

次に，以上の理論検討を踏まえ，札幌アーティスト・イン・スクール事業を事例に活動理論のフレームを用いて分析する。この実践の考察から，アートの媒介によって既存の日常の文脈に対する集団的省察が促され，矛盾をはらむ状況を打ち破って新しい日常が創造されることがわかる。それは学校空間の質的変容に示唆を与えると考えられる。

【キーワード】アートを媒介にする教育的アプローチ，集団的創造活動，芸術の教育的作用，ソーシャリー・エンゲイジド・アート，交渉によるノットワーキング

一，はじめに

アートを媒介にする教育的アプローチは，アート活動を通じて教育実践を展開することを目指すものである。その特徴と意義を解明するために，本稿は，学校空間の日常を媒介するアートによる集団的創造活動に焦点を当て，実証的に検討することを目的とする。

芸術は「古代から教育の一部として，教育の手段として…見なされてきた」[1]が，第二次世界大戦直後北イタリアの都市レッジョ・エミリアで始められた「レッジョ・エミリア・アプローチ」は新しい教育的アプローチと言える。このアプローチは，教育者が芸術家との連携でアート的経験に基づく「学びの共同体」をつくる取り組みである。子どもたちは，仲間や大人とコミュニケーションしながら，豊富な素材を活用して創造的に物ごとを探求したり，自発的に自分を表現したり，幼児学校の豊かな日常生活の中で生き生きと成長していく。

レッジョ・エミリア・アプローチは，芸術作品の制作よりアート活動に参加すること自体に関心を寄せ，「子どもと大人の双方が創造性を発揮し，共に学び育ちあうかかわりを形成す

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

[1] 『芸術心理学』，P337

DOI：10.14943/b.edu.137.31

ることに」[2]着目している。佐藤学（2001）は，このようなアート教育は，「子どもの潜在的可能性を最大限に引き出している」[3]と同時に，「日々の生活を創造的に生きる」ことないし「社会や世界を創造し変革する一人ひとりのヴィジョンをかたちづくる」[4]ことにもつながると評価した。

一方で，アートが社会の公共領域に直接関与し何らかの変革をもたらそうとすることは，芸術の分野でソーシャリー・エンゲイジド・アート（Socially Engaged Art，以下SEAと略称）として捉えられる。SEAの特徴としては以下の三つが挙げられる。

(1) 他の分野との境界線を大きく超え，その言語やプロセスを通じて公共圏（Public sphere）に影響を与えようとしている；

(2) 社会的相互行為（Social Interaction）を通じて集団（Community）の関係性が構築される；

(3) 社会の諸問題と向き合い，真の解放力（Emancipatory force）を持っている。

――『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』より

パブロ・エルゲラ（2015）は，レッジョ・エミリア・アプローチを「教育のツールがソーシャリー・エンゲイジド・アートに役立つことの一例」[5]として挙げ，それが「教育的プロセスがアートワークの中心に」ある「芸術特有のパターンで，唯一芸術において起こるパワフルで，ポジティブな教育の再構想」[6]を提案していると指摘した。

エルゲラが「教育的プロセスとしてのアート」を提起した背景には，SEAが有する社会的インパクトをどのような基準で評価するかについて，「従来の『芸術』概念に基づく理論，ないしその批評基準の見なおしを迫りつつ」[7]，一九九〇年代から論争が際立ち始めたことがある。

この「教育的プロセスとしてのアート」を「アートを媒介にする教育的アプローチ」に言い換えて理解すれば，SEAがどのような教育的プロセスでどのような方向性へ変革をもたらすか，という課題をアートと教育学との接点から検討する必要がある。そのために，本稿はSEAの特徴を踏まえ，学校空間の日常を媒介するアートによる集団的創造活動――札幌アーティスト・イン・スクール（Artist in School，以下AISと略称）事業を事例にして，アートを媒介にする教育的アプローチの特徴と意義を実証的に明らかにすることを試みる。

AISは一般社団法人AISプランニングによって企画・コーディネートされ，2006年から毎年札幌市内の小学校で行われるアート事業である。アーティストはゲストティーチャーとしてではなく，転校生として小学校に招かれ，二週間ほど滞在する間に，子どもたちと同じように学校に通い，一緒に給食を食べることもあれば，授業を見学することも時にある。それに，学校内の余裕スペースをアトリエにして，休みの時間にアートの要素を持ち込んで一緒に創作することもある。

活動の内容がアーティストにより異なり，各学校の目標や特色，そして地域環境と歴史も様々であるが，アーティストの創作活動をきっかけに，一定のスケジュールに沿った小学校

---

[2] 『子どもたちの100の言葉―レッジョ・エミリアの幼児教育』，P502

[3] 『驚くべき学びの世界――レッジョ・エミリアの幼児教育』，P8

[4] 『子どもたちの100の言葉―レッジョ・エミリアの幼児教育』，P503

[5] 『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』，P16

[6] 同上，P160

[7] 『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践』，P148

の日常に介入することで,「異なるルールや価値観，考え方を持つ社会が混ざり合う場を作」り,「人と人が出会い，新たな人間関係が生まれてゆく」[8]という点からみれば，AISはSEAの性格を持っていると言えよう。

AISはレッジョ・エミリア・アプローチと同じくアートと教育学との接点に位置づけられる。AISの中心にある教育的プロセスはどのような構造で成り立つか，活動の過程でアートの経験がどのような役割を果たすか，どのような可能性を導き出しうるか，という課題を解明すれば，アートを媒介にする教育的アプローチの研究へ新しい示唆が得られると考えられる。

二，先行研究

ヴィゴツキーは，芸術は「私たちの行動や有機体の一定の長期にわたる変革」を促すことに教育的作用があると指摘した。具体的にいえば，美的経験が必ずしも「直接になんらかの具体的反応，運動，行為と結びつく」とは限らないが，それがもたらした感情の対立を克服することを通して，感情の昇華と精神的浄化，いわば「カタルシス」が機能する。芸術は，カタルシスによって「私たちの行動を未来へ向けて組織化」し，とりわけ「私たちの行動の危機的瞬間における，環境と有機体との均衡の複雑な手段」である。[9]

このような場合，感情の対立を克服することや「危機的瞬間」に「打ち勝ち，勝利すること」は「創造的行為」と見なされる。[10]なぜならば，美的体験は,「何らかの現象分野に関する私たちの見方を実際に拡大し，それらを新しい目で眺め，一般化し，しばしばまったくばらばらの事実を結びつけることを可能に」するからである。ただし，この過程で「現実の創造的加工」が要求される。つまり,「日常的経験を明瞭なものにし，創造の水準にまで高める自分自身の運動や事物の創造的加工が行動原理」となる必要がある。[11]

SEAはむしろこういう芸術の教育的作用をアート実践に果たす上で社会の仕組みへ働きかけ，変革を求めているであろう。例えば，宮﨑（2018）は，アートが有する日常性からの解放機能を実証的に検討するため，2015年度音楽家永田壮一郎さん[12]のAIS活動を取り上げた。教師集団は「転校生」としてのアーティストとともに共同演奏を行うことで,「教師―生徒」と「大人―子ども」という日常関係の二重化を意識し，さらにその二重化を超える新しい協働的関係性を創造することに,「アートの持つ…解放による創造の方向性」[13]が見られる。

そうであるならば，同じ場所にいる子どもたちにも「教師と同様の集団的省察が生じる」[14]可能性があると宮﨑は提起した。しかし，子どもたちも「日常的経験」を省察することを通

---

[8] 『学校は社会の入口？――札幌アーティストインスクール事業おとどけアート2016記録集』

[9] 『芸術心理学』，P330-337

[10] 同上，P330

[11] 『教育心理学講義』，P263-264

[12] 永田壮一郎さん，山口県出身，東京を拠点に活動する音楽家／作曲家である。2015年と2018年に，AIS事業に招聘され2週間ほど札幌市内の小学校に滞在した。

[13] 「再媒介活動としてのアート：アーティスト・イン・スクールの可能性」

[14] 同上

して学校空間に新しい現実を創造することができるであろうか。

子どもが美的経験に参加することについて，ヴィゴツキーは，その教育の構造は「個人的な限られた経験の枠を最大限に広げ，子どもを生活のできる限り広い網の中に取り込むように」向けられるべきだと主張し，「現実の創造的加工」の努力は，「子どものすべての運動，すべての言葉，すべてのほほえみに浸透し」なくてはならないと述べた。[15]

AISの現場では，子どもたちはいつもと違った新鮮な雰囲気の中で新しい行動や体験を次々と引き起す。ただ，このようなアートの創造的経験が子どもたちに作用する教育的プロセスはまだ明らかにされていない。本稿は，AISにおける芸術の教育的作用が機能するプロセスを活動理論のフレームにおいて分析していきたい。

その理由は，第一に，活動理論は，「文化―歴史的活動理論」と言われ，人間の活動を分析するに，文化―歴史的な社会的構造も人間の行為の要因として取り入れたものであるからである。これは社会に直接関与するSEA活動を分析するのに適していると考える。

第二に，活動モデルの図式を使って，活動の主体と対象と媒介項の構造（=主体－対象－道具），個人的行為と集団的活動との「複合的な相互関係」[16]（=主体－対象－道具－コミュニティ－ルール－分業），及び活動システムの間のネットワーク（図1）を明瞭に把握できるためである。本稿はSEA活動における「相互連結し相互依存するようになっている」[17]活動システム間の関係性を図式化する試みをしたい。

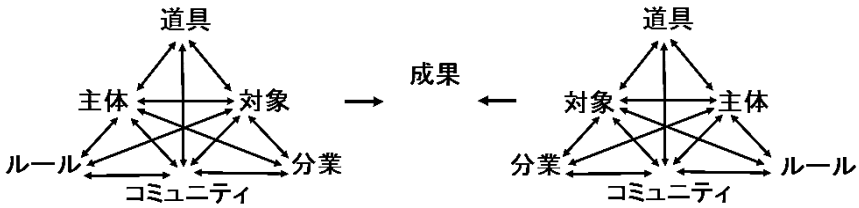

図1　相互依存する活動システム[18]

第三に，活動理論によると，活動が変化する際の駆動力は内的矛盾である。「人間活動のもつ基本的な内的矛盾は，…個人の行為と全体的な活動システムとのあいだの衝突として不断に矛盾が生み出される」ことである。[19]アートによる集団的創造活動の現場で生じた「感情の対立」や「危機的瞬間」を人間が矛盾に陥らざるを得ない状況として理解すれば，これらの矛盾を自覚し，新しい局面を創造しようとする過程は本当の意味での学習活動と認識できる。この学習活動は「現実の創造的加工」であり，芸術のカタルシス機能によって「未来へ向けて組織化」されたものである。

これを検証するために，本稿は「相互依存する活動システム」のモデルを用いてAISの活動を仮説的に整理し，そのモデルと照らし合わせて実際に展開するAISの状況を分析し，芸術

15　『教育心理学講義』，P263-264

16　『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P3

17　『拡張的学習の挑戦と可能性: いまだにここにないものを学ぶ』，P45

18　同上，P45-47

19　『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P84

の教育的作用がどのように日常にはらむ矛盾を顕在化させ，さらに矛盾を乗り越え未来へ向けて変革しようとする創造行動を如何に促すのかを解明しようとする。

ここでまず，AISの基本構造を，伝統的な教えることと通学することを相互に連結する活動システムとして描いた構造[20]を参照して，以下のような図式で表示する。この構造の中に，アートの媒介によって現れた「協働構成（co-configuration）」を「交渉によるノットワーキング（negotiated knotworking）」[21]と定義する。

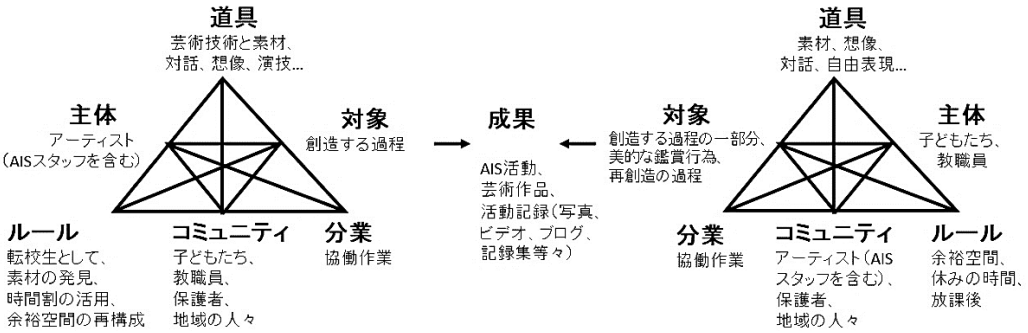

図2　AISのノットワーキング構造

このAISのノットワーキング構造について，留意すべきところが三点ある。

一点目は，「教師―生徒」という制度化された日常から「大人―子ども」の関係性への意識変化が実証されている[22]ことを前提に，ここでは「生徒」ではなく，「アーティスト―子どもたち―教師」の三項を参加主体としてAISのノットワーキング構造を描くことにする。AISが媒介する学校空間では，通常の「教師―子どもたち」の相互主体関係は依然として存在しているが，転校生としてのアーティストはそれに縛られず，独自の主体性を持っている。いったん活動が始まると，AISの基本構造に変化が現れ，そこから三項間の新しい関係性が見られる。

二点目は，「教師―子どもたち」の双方が主体として交渉によって維持される普段の学校活動の構造は，アーティストの介入によって図2のように現れたが，本稿は実際の活動現場での子どもたちの主体性に着眼して分析したい。

三点目は，いったん活動が終わってアーティストがいなくなったら，AISのノットワーキング構造が消えてしまい，学校空間は元の状況に戻りかねないのではないかという見方が示したように，AISが一時的に学校空間をある程度変容させたとしても，質的変容につながるかどうか，という懸念が残っている。本稿は，2018年度のAISへの参与観察から得たデータに基づき，活動理論のフレームを用いてAISのノットワーキング構造の生成過程を考察し，アートによる集団的創造活動がいかに学校空間の質的変容につながるかを実証的に分析する。

---

[20] 『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』，P145

[21] 同上，P35

[22] 「再媒介活動としてのアート：アーティスト・イン・スクールの可能性」を参照されたい。

三，対極する二つの活動システムとその矛盾

2018年のAISは永田壮一郎さんの二回目の招聘である。三年前永田さんは自分の「行動や発言に触発された教職員」とバンドを作り，最終日に体育館で共同演奏を行い，「学校の日常では想定されることのないイレギュラーな時間を生み出し，子どもたちを巻き込んで共有する状況を作り上げていった」[23]。

今回のAISは2018年10月30日から11月9日までの期間に小学校で活動を行う予定であったが，永田さんは学習発表会があると聞いて，24日に子どもたちの発表を見に行き，その日から学校の中の観察や探索を始めた。筆者もコーディネーターチームの一員として活動に参与した。25日の学習発表会全プログラムが終わってから，校長先生に永田さんを転校生として紹介してもらった。

前回の経験を踏まえ，今回永田さんは学校の先生や子どもたちが「自分という存在にどんな反応を示すか」を知ろうとして，「その反応を示した人にフォーカスし，より深くかかわっていく態度」[24]を決め，敢えて明確な計画を持たずに学校に入り，当初は学校内をうろつく間に当該校固有の枠組みを観察していた。

今回の小学校では，一般的な規則において建物内の階段利用の学年分けまで厳しく決まっていて，休みの時間に「静かにしてください」という看板を子どもが廊下で掲げるという当番もある。

制度が隅々まで行き届く学校の日常性を感じ取って，アーティストはわざと教師にも子どもたちにも自ら寄り添う行動をとらず，学校空間に「閉じ込められた転校生」の立場を取り，子どもたちを待ち構えることにした。その間に，「決まりの中で決まっていないこと」をしようと考えていた。アーティストのいう「決まっていないこと」は，まさに「学校制度のフォーマルな構造と授業の内容や方法との間」，いわば「中間の階層」[25]で媒介者として行動することである。

ルールを知らない，あるいは知らぬふりをしているアーティストが現れたことで，子どもたちは好奇心に駆られ，アーティストの後ろについて歩いたり，話しかけたり，アーティストを自分の教室へ連れて案内したり，さまざまな形のコミュニケーションを自然に始めた。

しかし，媒介者としての行動が始まると，それは直ちに，「中心的活動システムから「『逸脱した』生徒の行為をたえず生産しつづける」という学校空間に潜在している内的矛盾[26]と向き合わざるを得なくなる。

というのは，アーティストの介入を切り口に，学校教育の内的矛盾によって不断に発生する逸脱した行為，もしくは逸脱しようとする傾向が，アーティストの周りに引き付けられ，「余裕スペース」や「休みの時間」，すなわち「中間の階層」へ集まってくるからである。

---

23 『学校の隙間　日常の余白：札幌アーティストインスクール事業2015記録集』

24 『アーティストと考える学校の未来：札幌アーティストインスクール事業2018記録集』

25 『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』，P141，P139

26 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P112，学校教育の活動における矛盾についての分析は同書の第2章を参照されたい。

「逸脱した」子どもたちがアーティストのところに集まることにより，新しい集団的主体が浮かび上がってくる。活動の二日目，「なんで永田さんを待っているの」と訊かれた時，ある五年生が「おもしろいじゃん」と答えた。このように何の目的も持たずにアーティストに近づいてくる子どもがいる一方で，同じ日にスクールバンドの子どもたちは何らかの期待をもって下校時間にアーティストに声をかけた。

スクールバンドは学校の部活動ではなく，保護者が音楽室を借りて吹奏楽器を教える少人数の子ども団体である。先生や子どもたちにあまり知られていない存在で，勉強に集中させることを理由に親にやめさせられた子もいる。「部員の減少によって存続の危機にさらされていた」[27]。

つまり，スクールバンドの活動は，子どもたちの自発的アート活動として学校教育では正統性を承認されないまま継続している。参加者は，自発的アート活動と学校の教育活動との二つの対立した方向に引っ張られることに伴って，二つの方向に向く「感情の対立」が生じている。それは第一の矛盾といえる。スクールバンドの子どもたちが毎週一回の練習をあきらめずに続けていたことは，芸術のカタルシスによってこの矛盾を克服する努力である。

このような状況でスクールバンドの子どもたちはアーティストと出会ってコミュニケーションしているうちに，「人数を増やしたい」，「それに向けて一緒に何かをしたい」という共通意識を明確に持つようになったのみならず，最終日に共同演奏をする目標も見出せた。「中間の階層」へ逸脱し，そこで対話したり，共感したり，同じ目標に向かって練習を進めることで，音楽に基づく共通意識と相互理解が深まり，新しい関係性がうまれつつある。第一の矛盾は中間の階層でアーティストとともに解決される可能性が見えるようになった。

最終日の演奏について，二つの段落に分ける提案がアーティストからなされた。第一段落はスクールバンドがアーティストのピアノとの共同演奏を行い，いったんそれが終わってアーティストが合図をしたら，先生たちは音楽室の後ろに並べている木琴でチャイムの音をたたき出し，演奏を見に来る子どもたちと一緒に楽器を奏でながら徐々に廊下へ移動する。それと同時にスクールバンドも演奏を止めずに音楽室から出て合流する。しかし，演奏が始まる直前の打ち合わせで，スクールバンドの子どもたちは，「第一段落はいいんだけど，第二段落はいやだ。」と言った。

「第二段落はいやだ」という言葉は，「アーティストのそばから離れて，先生やほかの子どもたちの中に戻るのがいやだ」というふうに捉えれば，AISの媒介によって「与えられた新しい活動」と学校の中心的活動システムとの間に存在する第二の矛盾が表象されたように思われる。アーティストとの共同演奏はスクールバンドの子どもたちにとって集団的主体としての新たな協働創造の経験であり，音楽室の外の空間――フォーマルな学校活動――と「対極的な出発点」[28] に位置する「ミクロコスモス」[29]のように見える。このミクロコスモスから出て独自で学校の中心的活動システムと対峙することへの緊張感は「感情の対立」をいっそう高め，その高まりがスクールバンドの子どもたちの「第一段落はいいんだけど，第二段落はいやだ。」という言葉で表現された。

---

27 『アーティストと考える学校の未来：札幌アーティストインスクール事業2018記録集』

28 『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』，P85

29 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P297

アートの媒介がもたらした「感情の対立」には，スクールバンドの自発的行為と学校の集団的活動との「第一の矛盾」があり，AIS活動と学校伝統的な教育活動との「第二の矛盾」がある。この対立の顕在化は，「中間の階層」という学校の「動機づけの領域」で新しい集団的活動システムが創り出されたことに起因する。

AISの現場では，先生もほかの子どもたちもいつもの学校と違った雰囲気に違和感を抱え，アーティストの振る舞いと学校の日常的文脈との矛盾やAISの自由参加の形態と学校のルールとの矛盾など，彼らは永田さんの存在に反発しながら受け入れようとする時に「感情の対立」も生じ，多層的な矛盾を感じた。

永田さんのことをさいしょは「なんだこの人」と思っていたけど，こんなすばらしいピアノひける人だったんだ〜。と思いまともにすいませんでした。(3年生)

最初までは何だか，何をしに来たのか分からなかったけど，…世の中にあんなに面白い大人がいたことを発見しました。(6年生)

普段の学校のルールを守りながらどこまで自由に活動できるか。(2年学級担当)

学校で求めることと活動にずれが生じる…（6年担任)

——AISプランニングが実施したアンケート調査の回答より

矛盾は「活動の革新的で発達的な潜在力を理解する上でも，鍵となる」[30]。矛盾を意識したスクールバンドの子どもたちが，これを克服して未来へ向けて協働的に行動できれば，学校空間に変容をもたらすかもしれない。演奏が始まる直前の提案はスクールバンドの子どもたちにとって「危機的瞬間」と言ってもよいであろうが，アーティストはさらには指示を与えないままであった。

四，新しい活動モデルとしてのノットワーキング

最終日の演奏について以下の記録がある。

演奏する前の段階ですでに音楽室には入りきらないほど。子どもたちだけでなく，先生たちも姿もありました。大人数に囲まれ，(永田さんと）スクールバンドの子どもとの演奏が始まりました。…（永田さんが）合図をすると…チャイムの音階に子どもたちが一斉に（音楽室の後ろに）振り向き，立ち上がります。

そして，ひとつだったチャイムの音階は徐々に周囲に置いてあった楽器へと広がり，延々と繰り返されます。先生たちが楽器を弾くと，自然と子どもが個々の楽器を囲み，子どもらへとバトンタッチする様子も。

その後は，永田さんとスクールバンドも加わり，音楽室は音で飽和状態となりました。

様々な楽器で繰り返し鳴らされるチャイムの音階は音楽室だけにとどまらず，廊下へと。まさしく音のように届く範囲が広がっていきます。廊下中に楽器とそのメロディーがある状況で，その全体像は誰一人見きることができなかったのではないでしょうか。

——AISのブログ：アーティスト・イン・スクール〜転校生はアーティスト〜より[31]

---

30 『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』，P47

31 「アーティスト・イン・スクール〜転校生はアーティスト〜」，https://inschool.exblog.jp/238852871/（最終閲覧日2020年8月25日），記録者はコーディネーターの杉本直貴さんである。

実際に第二段落を始めると，先生も自分たちの演奏に呼応して木琴を叩いていたし，先生の代わりに楽器で音を鳴らし始めた子ども増えていて，スクールバンドの子どもたちは思わず廊下へ移動する人の流れについていった。最終日の映像記録では，演奏が終わっても廊下で友達に囲まれて笑いながら話しているスクールバンドの子どもたちの様子が見られる。

スクールバンドの子どもたちは音楽室から廊下へ，楽器を奏でている先生や子どもたちに加わるようになり，アーティストが見ていないところでピアノの音と合わせて演奏を続けた。ということは，カタルシスによって感情の対立を克服して危機的瞬間に打ち勝ったのみならず，創造的行為を通して現実の枠組みを広げ，新しい現実をつくったといえよう。

つまり，スクールバンドの子どもたちは，AISの媒介によって「与えられた新しい活動」（=AIS活動）の不安定性を感じながらも，ピアノとの共同演奏を止めずに音楽室から出るという行動を通して，学校固有の「古い活動システム」（=中心的活動システム）との矛盾を乗り越えようとした。それは，「新しい行為が予期していた以上に豊かな結果を生み出し，与えられた新しい活動の制約を，より広い，制御不能なものへと変えながら，拡張し，転換し，さらには打ち破るときに現れる」「創造された新しい活動」[32]と認められる。

第二節の図2に基づいて述べるなら，「対極的な出発点」に据えている「AIS活動」と「学校の中心的活動」の二つの活動システムを自発的で協働的な行動で結びつけ，その結び目を作ることはノットワーキングであり，上述の「創造された新しい活動」である。スクールバンドの子どもたちは，主体性を発揮しノットワークを作り出し，現場にいる人びとを巻き込む校舎全体での共同演奏を実現したとはいえる。

しかし，もしこのようなノットワーキングを新しい活動モデルとして位置づけるならば，それが学校空間においてどの程度確立できるのかをさらに明らかにする必要がある。

五，AISのノットワーキング構造の特徴

最終日の演奏に参加したある男の子はスクールバンドの元の部員で，昼休みのとき練習しているスクールバンドの様子を覗きながら，何回も「懐かしい！」と言った。ほかに楽器をやっている子がいますかとアーティストが問うた際には，彼はスクールバンドの子から推薦されたのである。ところが，演奏が終わったら，「スクールバンドに戻りますか。」と尋ねられると，彼は，「いいえ，戻りません。」と答えた。

この男の子は，AISのノットワーキング構造の中で動きの自由を持っているかのように行動している。ノットワーキングを特徴づける流動性がそこから見られる。「ばらばらに見える活動の糸を結び，ほどき，結びなおす動き」は，「あらかじめ決定済みの固定したルールがなく，また権威の中心が決まっていない」[33]ため，あらゆる可能性を試すことができる。その際，「協働のノットが結びついたり解かれたりする」[34]主体の行動がどのように方向づけられていくのかという点が，AISの事例に即して考えれば，アートの経験の決定的な要素となる。

---

32 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P229，P235

33 『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』，P311，P35

34 同上，P311

この点に関わって，美的経験の子どもの人間形成に対する影響について，モレンハウアーは以下のメカニズムに論及した。「芸術の形をとった美的経験」が鑑賞的であれ，制作的であれ，受容的であれ，自発的であれ，活動の主体はまず自分自身の内的感覚に注意を向ける。「私の感覚は，…私に主題化されている」。それと同時に，「私の感覚」が獲得された「所与の文化的コンテクスト」にも直面しなければならない。したがって，「私が客観的に向かい合う文化の現実」も主題化される。アート活動は，「世界と自己とをともに主題化するような経験を可能にして，…内界と外界を媒介する」。さらに，「注意が向けられた結果として初めて生まれる疑問，省察，疑惑，修正についての経験可能性を主題化する，…『反省』と呼ばれる過程」がある。[35]

スクールバンドの子どもたちをはじめとする集団的主体は，意識的であるかどうかにかかわらず，自分自身の感覚と，身近な環境ないし自分自身と環境との関係の変化に気づき，それを共有しながら反省している。

ながたさんのおかげで学校ぜんたいが明るくなった気がしました。(2年生)

学校のチャイムがきれいな曲になること（を発見した)。(6年生)

――AISプランニングが実施したアンケート調査の回答より

小学校において時間の区切りとして鳴らしているチャイムは，今回その音階を曲に組み入れて演奏した。子どもたちはこれらの新鮮な体験をともに経験し，個々の「反省」が同時発生して共鳴している。この「反省の過程」を「集団的省察」といってもよいであろう。

一方で，スクールバンドの子どもたちは，「集団的省察」に基づいて自発的にノットワークを作りだすことで矛盾を乗り越える新しい活動モデルを提示した。

もし「集団的省察」の波紋が「逸脱した」子どもたちから図2の全体へ広がっていくことが可能だとすれば，AISのノットワーキング構造は「結びついたり解かれたりする」うちに，「新しい活動モデル」として「中間の階層」から学校空間全体へ確立することもできるであろう。これについて，子どもと教師へのアンケート調査の回答から確認しておこう。

六，学校空間における新しい活動モデルの芽生え

今回のAISは，終了した二週間後，AISプランニングが全学年（特別支援学級を含む）の子どもと教師を対象にアンケート調査を実施した。アンケートは「AISが小学校の日常にどう作用しているのか」という関心を持ち，「印象に残った思い出」，「永田さんとの出会いや活動を通して発見したもの」と「小学校への期待」など自由記述の質問を出した。回答数は子ども553名，教職員21名，回収率は100％に近い。

「みなさんは自分たちの学校をどんな場所にしたいか」に対して，ある六年生は以下の回答を出した。

自分の能力，特技にとっか出来るような，たとえば声優になりたい人は声の勉強，数学を学びたい人は数学の勉強，学校は人の能力，特技を消し，へいきん的な能力をつけるとこなので，以上の事をしたらこのよは天才だらけになると思います。ただこの様な事をしたら個

35 『子どもは美をどう経験するか：美的人間形成の根本問題』，P27-30

せいがあふれすぎると思うので，今のままが良いと思います。

――AISプランニングが実施したアンケート調査の回答より

確かに，最終日でも音楽室へ来なかった子もいた。特に音楽室の向こう側の教室の中で，何人かの六年生は音楽室で何が起こっているかに無関心なように見える。しかし，それは「今のまま」の学校を守る姿勢といえるであろうか。

「今のまま」の学校とは，子どもの成長を育むと同時に，彼らの学習活動を「狭い専門化」[36]によって統制している場所である。なおかつ，学校は発展すればするほど，既存の枠組みが「自己防衛的」に「カプセル化」[37]されつつ，子どもの成長の多様性を受け入れる余地がなくなる。それがゆえに，子どもたちの「逸脱した」行為を「たえず生産しつづける」と考えられる。

「今のままが良い」という表現は，学校が自分の「能力，特技を消し，へいきん的な能力をつける」という共通意識が日常に浸透しているのに，なぜ今この規則を打ち破る行動が先生たちに認められたのか，と訴えているのではないか。これは，スクールバンドの子どもたちの言う「第二段落がいやだ」と，元スクールバンドの男の子の言う「戻りません」と同じように，AISの介入をきっかけに，アートの経験が「私の感覚」と「私のいる現実」を対象化し，反省の過程によって自分が埋め込まれた日常の「文脈の文脈」，つまり，「全体的活動から生じた新しい課題を，…疑問視」[38]し，省察していることを示している。

この省察の共有に基づき，活動に参加する形態が異なっても，AISに関わる子どもたちも教師たちも共鳴し合っている。

小学校の閉鎖的な感じがなくなり，開かれた場所になっていくといいなとは思いますが，難しいのだろうと感じます。（6年学級担当）

（学校が将来的に）教育活動というか，学ぶことを楽しめる場所になってほしいです。今現在もそうであってほしいですが，やるべきことが多くて苦しい面もあります……（教務主任）

――AISプランニングが実施したアンケート調査の回答より

今回のAISはアーティストがただ「自分という存在に反応を示した人にフォーカスし，より深くかかわっていく態度を貫いていった」[39]が，子どもたちにも教師たちにも集団的省察が生じたことがわかる。アートは学校の日常の「教師―生徒」関係を媒介し，図2のAISのノットワーキング構造をもたらしただけでなく，2015年度のAISに対する考察の結論と同じように，「教師の集団的省察と生徒の集団的省察…の相互連鎖」を再媒介し，「学校という場の再定義の可能性を切り開く」[40]ことも期待できるであろう。

とはいえ，以上のアンケート調査の回答からみれば，子どもたちも教師たちも現状にとらわれ，矛盾を抱えた状態にとどまっている。言い換えれば，「活動の潜在的な主体である参加者」[41]は，矛盾を意識するように促されたあと，この顕在化された矛盾を解決するために，いかに自らの行動で新しい活動を創造するかを手探りしなければならない。

---

36 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P319

37 同上，P237

38 同上，P231

39 『アーティストと考える学校の未来：札幌アーティストインスクール事業2018記録集』

40 「再媒介活動としてのアート：アーティスト・イン・スクールの可能性」

41 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P339

ただし，スクールバンドの子どもたちは，自分の創造的行為でスクールバンド自身の危機を乗り越えた。

去年，小学校で演奏した後で先生方に「部員きっと増えますよ」つったら，先生が「増えないすよw」て笑いながら言ったんで…

部員が3人も増えたとのことで喜び隠せず。

――永田壮一郎さんのTwitterより

七，結論

AISの活動では，アートの創造的体験を「スプリングボード」にし，「個人的に表明された疑いやためらい，混乱が出発点」[42]となり，中心的活動システムから「逸脱した」集団的主体がアートの媒介によるノットワーキング構造を創造した。さらに，そのAISのノットワーキング構造は新しい活動モデルとして，スクールバンドの子どもたちからAISの全体構造へ，「中間の階層」から学校空間全体へ拡張し，学校に関わる人々を固有の枠組みから解放しようとしている。

AISはSEAとして，アーティストが（AISのコーディ―ネーターと一緒に）手探りで学校空間に入り，アート体験の場をつくりだし，関わる人々が創造性を発揮できる学び合う環境と関係を築くという点はレッジョ・エミリア・アプローチと共通している。それと同時に，レッジョ・エミリア幼児学校と異なる学校の日常の文脈において，アートの媒介によって既存の日常の文脈に対する集団的省察が促され，矛盾をはらむ状況を打ち破って新しい日常が創造されることは，本当の意味での学習活動である。この学習活動では，子どもたちが「バラバラな学習主体として」ではなく，「学習活動システム全体の主体として」[43]位置づけられる。

本稿は，活動理論のフレームを用いて，この学習活動の生成過程を芸術の教育的作用が機能するプロセスとして分析してきた。それの学校空間への定着過程は，AISが終わってから学校に関わる人々が直面する新しい学習過程である。本稿の考察が示したように，アーティストが介入しない学校の日常では，子どもたちと教師たちと双方が主体として交渉した上で協働的で創造的にノットワーキングを構築することは，「学校における学習活動へのブレークスルー」[44]になり，学校教育の内的矛盾を根本から変えるという学校空間の質的変容に示唆を与えると言えよう。

---

42 『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』，P285，P333

43 同上，P111

44 同上，P113

八，終わりに

本稿は，アートによる集団的創造活動によって学校空間で新しい集団的主体が新しい活動モデルを確立しようとする過程を実証的に分析してきた。残された課題としては以下の二つが挙げられる。

一つ目は，SEAを特徴づける「社会性」をAISの事例からどう理解するかということである。実際の社会生活と距離をとった学校に，AISは外側から社会的なものを持ち込んでいる。しかし，もし社会の一般的な物差しが「社会的」だとすれば，そこから逸れてもっと大きな可能性のある世界へ踏みだそうとすることがアートである以上，学校はむしろ子どもたちに社会的なものをインストールする装置と言える。この二重の「社会的」の意味が衝突する上で機能した芸術の教育的作用はアートを媒介にする教育的アプローチを検討するのに深い意味をもっている。

二つ目は，AISは教師と子どもたちだけでなく，保護者や地域住民まで巻き込んだ大きな交流が生まれる場合も多い。学校空間で芽生えた新しい活動モデルを地域まで広げて考察する必要がある。レッジョ・エミリア・アプローチでは，学校は「人々の帰属意識を高め，地域の知識を蓄積し，個々人の意見を表明することを通して子どもたちにも大人たちにも貢献する参加の機会を生み出す」という「市民社会の結び目」として，「市民社会全体に求められる新たな市民性のアイディアを構築し実践する場所を提供」している[45]と評価される。一つ目の課題と結びつきながらアートを媒介にする教育的アプローチが有する社会的日常生活の文脈における意義についても今後の課題とする。

九，参考文献

ヴィゴツキー（2006）『芸術心理学』（新訳版，柴田義松訳），学文社

ヴィゴツキー（2005）『教育心理学講義』（柴田義松ほか訳），新読書社

宮崎隆志（2018）「再媒介活動としてのアート：アーティスト・イン・スクールの可能性」，『社会教育研究』，第36号，北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室

パブロ・エルゲラ（2015）『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』（アート&ソサイエティ研究センターSEA研究会訳），フィルムアート社

アート&ソサイエティ研究センター SEA研究会（2018）『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践』，フィルムアート社

ユーリア・エンゲストローム（1999）『拡張による学習：活動理論からのアプローチ』（山住勝広ほか訳），新曜社

ユーリア・エンゲストローム（2013）『ノットワークする活動理論：チームから結び目へ』（山住勝広ほか訳），新曜社

ユーリア・エンゲストローム（2018）『拡張的学習の挑戦と可能性: いまだにここにないものを学ぶ』（山住勝広訳），新曜社

ワタリウム美術館，子どもたちの100の言葉展実行委員会，佐藤学（2011）『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』，Access

45 『驚くべき学びの世界――レッジョ・エミリアの幼児教育』，P244，P260

C.エドワーズほか編（2001）『子どもたちの100の言葉：レッジョ・エミリアの幼児教育』（佐藤学ほか訳），世織書房
クラウス・モレンハウアー（2001）『子どもは美をどう経験するか：美的人間形成の根本問題』（真壁宏幹ほか訳），玉川大学出版部
一般社団法人AISプランニング（2016）『学校の隙間，日常の余白――札幌アーティストインスクール事業おとどけアート2015記録集』
一般社団法人AISプランニング（2017）『学校は社会の入口？――札幌アーティストインスクール事業おとどけアート2016記録集』
一般社団法人AISプランニング（2019）『アーティストと考える学校の未来――札幌アーティストインスクール事業おとどけアート2018記録集』

A Study on Art-Mediated Educational Approach: Focusing on Collective Creative Activity in the School Context

Cai Yuexian

Key Words

Art-Mediated Educational Approach, Collective Creative Activity, Educational Effects of Art, Socially Engaged Art, Negotiated Knotworking

Abstract

This paper shows that educational practice through art activities could be considered as an art-mediated educational approach that should be investigated from the combined perspective of art and education. The purpose of this paper is to demonstrate the educational effects of art that could prompt collective critical reflection on the everyday context with simultaneous awareness of the contradiction in the situation. People involved in collective creative activities will be motivated to overcome the contradictory situation and create a new context. In order to clarify the process, I chose the practice of "Artist-in-school" Project in Sapporo which provides collective creative activities in elementary schools, as a case study. At the end of this paper, I pointed out that this art-mediated educational approach could lead to the transformation of schools.